田中小実昌「ポロポロ」論 ―― 黙説法とポロポロ ――

氏名（投稿段階では記入しない）

**要旨**

田中小実昌の戦争体験に基づいた連作短編集『ポロポロ』（1979年）の表題作「ポロポロ」は、連作中で従軍経験を描いてない唯一の作品である特殊な短編であり、小実昌の自伝的な小説である。こうした観点から、田中小実昌研究において重要な位置を占めている。先行研究では、小説「ポロポロ」の表題になっている異言「ポロポロ」は、現実の事実を物語の形式にすることへのためらいだと考えられてきた。私たちは、先行研究の指摘を物語論の枠組みに移し替えることで、異言「ポロポロ」が作中の「世間」と「自分」に所属しない状態を意味しているのを示し、小説「ポロポロ」の主題の1つである共同体からの排除が黙説法によって描かれていることが語り手が物語の末尾で父の代弁をしている理由を示した。

**キーワード：** 田中小実昌，ポロポロ，黙説法，物語論，ジェラール・ジュネット，ケーテ・ハンブルガー

1. 「ポロポロ」について

1979年に刊行された田中小実昌の『ポロポロ』は、1977年から1978年にかけて発表された、小実昌の戦争体験に基づいた短編小説集だ[[1]](#footnote-21)。同年には谷崎潤一郎賞も受賞し、小実昌の代表作となっている。表題作「ポロポロ」の作中時間は太平洋戦争が開戦した頃の昭和16年12月。語り手「ぼく」は、広島の呉にある山の斜面に築かれた住宅を独立教会として運営する父の定例の祈祷会で信者に振る舞う「おセンベか何か[[2]](#footnote-22)」を買いに、町へと下りた。その帰り道、祈祷会でいつも「ポロポロ」と異言をつぶやく一木さんに背格好がよく似た、ソフト帽をかぶり、二重まわしを着ている人を石段で見かけ、そのそばを横切った。家に帰ってから、一木さんが玄関から入ってこれるように戸を開けておいた「ぼく」だったが、祈祷している部屋にはすでに一木さんがいた。さらに、気がつかないうちに玄関の戸は音もなく閉まっていた。「ぼく」はそのことを父に話したところ、命日だから死んだ祖父の霊が現れたのだ、言われる。「ぼく」はそれが合理的な解釈だと思う。

「ポロポロ」は、連作短編中、従軍経験を描いてない唯一の作品であるという点で特殊な短編であり、呉に実在した独立教会アサ会の創始者田中種助を父にもつ小実昌の自伝的な小説である。こうした観点から、田中小実昌研究において重要な位置を占めている。私たちは、2節で「ポロポロ」の先行研究での共通した主張をまとめ、それを物語論の枠組みで論じる際に、作中の語り手と小実昌をある程度同一視する前提を確認する。3節で、その前提に基づき、小実昌の父種助と異言「ポロポロ」に関して虚実の確認作業を行い、それに伴って異言「ポロポロ」の具体的な意味を定義する。4節で、黙説法による語りと共同体からの排除という主題が対になっており、それが異言「ポロポロ」のもつ構造に対応しているという指摘をする。

2. 先行研究の検討と田中小実昌の「体裁」について

初めに、谷崎潤一郎賞での評価を確認する。1979年（昭和54年）の谷崎潤一郎賞の候補作品には三木卓『野いばらの衣』、山崎正和の戯曲『地底の鳥』、李恢成『見果てぬ夢』があり、それら評価は『ポロポロ』同様、高かった。7名の審査員のうち、円地文子、丸谷才一、大江健三郎の3名はそれぞれこれらのうちの1つを推薦している[[3]](#footnote-23)。しかし、大勢として小実昌への授賞で意見はまとまっていた。遠藤周作は、「『ポロポロ』はいかに正確に自らを語られるかと言う［原文ママ］自己検証の作品であり、その正確に執拗に迫るくりかえしがこの作品に迫力を与えている[[4]](#footnote-24)」と述べている。大岡昇平は「寝台の穴」における、語り手が、物語が事実と常に異なってしまっていると内省する箇所を引きつつ[[5]](#footnote-25)、「このような文学の本質に触れた言説が、物語の中に混じっている[[6]](#footnote-26)」と評価している。丹羽文雄は、「ポロポロ」に「宗教的感動[[7]](#footnote-27)」を覚え、「この小説は日本文学に新しい一頁を加えた[[8]](#footnote-28)」と激賞している。吉行淳之介は「大尾のこと」を取り上げ、人生の終始を描くことができるのは神だけであるという内容の一節を取り上げながら[[9]](#footnote-29)、「文学上のポロポロ[[10]](#footnote-30)」なる言葉で小実昌の連作を総括している。以上のように、『ポロポロ』全体は、物語という表現に対する内省や、語り手の宗教的な体験をふまえた表現が高く評価されている。

次に、「ポロポロ」の先行研究を確認する。1990年以降の田中作品の目録を編纂した伊藤義孝は、「ポロポロ」を含めた、戦争体験に基づいた後期の軍隊連作小説の分析を行なっている[[11]](#footnote-31)。伊藤は軍隊連作小説のプロットと描写に注目し、次のように述べている。

つまり、小説を書くという行為にせよ、発話行為にせよ、外界に対し、自己の内面をアウトプットする行為自体が意識の屈折をはらみ、誤謬、隠蔽、欺購、更に自己欺購にさえ通じる可能性を孕んでいることに小実昌は気づいているのだ。だからこそ、小実昌は事実を伝達すること自体を放棄し、「カンケイない」「仕方がない」「しょうがない」といった言葉でわれわれを突き放してしまうのだ[[12]](#footnote-32)。

『ポロポロ』やそれ以降の従軍体験を描いた小説における、事実を伝えるために物語という表現を用いるのに対する田中のためらいを「事実を伝達すること自体を放棄」しているとみなす伊藤の論調は、他の研究にも共通している。例えぱ、志賀浪幸子は、「北川はぼくに」の次の箇所に注目する。

だが、こんな物語は、北川にはしゃべれない。（略）内容が違うというのではない。内容も違うだろうが、内容の問題ではない。いや、それを内容にしてしまったのが、ぼくのウソだった。あのとき、北川がぼくにはなした、そのことがすべてなのにぼくはその内容を物語にした[[13]](#footnote-33)。

志賀浪によれば、この引用箇所は小実昌の物語という表現方法への不信が表現されている箇所だという。

「物語」への不信はこの作品［＝「北川はぼくに」］をはじめとして「海」に昭和五十三年三月より発表された一連の「兵隊もの」の中で、繰り返し描かれている。（中略）「ポロポロ」が「受ける」ことしか出来ない、所有することも出来ないものであったのは、それが外部からの意味づけや限定を拒みつづけるものであったからにほかならない。それは意味のある「言葉」を敢えて付すことの出来ないものであったのであり、その必要の無いものであった。だからこそ、「ポロポロ」は純粋な神への賛美たり得たとも言える。こうした環境に育った田中が外部からの安易な意味付け、「言葉」への過信に不信の目を向けたのは必然であった。（中略）「物語」にしてしまう、という事は、どういうことなのか。それは事実を「対象化」する事で、実際のものとは別のものを創り出し、別の意味を付加してしまうことと言っていいかもしれない[[14]](#footnote-34)。

志賀浪は、物語への不信は、物語によって事実を表現することで事実そのものに別の意味が付け加わってしまうことで生じるため、事実を言葉にすることも小実昌は最終的に拒んだと主張している。そのため、もしも事実と同じ水準で言葉を用いるのであれば、【傍点：ポロポロ】のように、事実に対して意味を付与しえない無意味な言葉が求められる。また、「ポロポロ」で、「信仰ももち得ない、と（悟るのではなく）ドカーンとぶちくだかれたとき、【傍点：ポロポロ】ははじまるのではないか[[15]](#footnote-35)」（傍点原文ママ）、事実を語るための無意味な言葉（【傍点：ポロポロ】）が信仰をめぐる経験と結びつけられていることから、志賀浪が「「ポロポロ」は純粋な神への賛美たり得た」と指摘するのは、それが賛美たりいているのかの疑問はひとまず措くとして、信仰と物語への不信を結び付けて考えている点で正しいように思われる。

志賀浪と同じく、「北川はぼくに」を取り上げる小説家の堀江敏幸は、『ポロポロ』の中でも、とりわけ「北川はぼくに」こそ、物語に収束しない出来事を表現する試みだと考えている[[16]](#footnote-36)。加えて、小実昌の没後に行われた追悼対談の中で、堀江は、小実昌の複数の小説やエッセイの中で同じ話を使い回す特徴を、【傍点：ポロポロ】が繰り返されるフレーズであるのと似ていると指摘している[[17]](#footnote-37)。

同じく小実昌作品全体において『ポロポロ』に言及する小説家の保坂和志は、それぞれの作品に共通する語り手の態度について、「荒っぽく言うと、小実昌さんは子どものように「見る人」「見てばかりいる人」だった[[18]](#footnote-38)」と指摘する。伊藤や志賀浪の議論をふまえれば、事実を言葉にしないのは、その事実の元となる出来事から距離をとる観察者の態度だと言い換えられるだろう。

以上のような、小実昌作品の語り手の分析や【傍点：ポロポロ】という言葉の分析のほかに、小実昌が自らの父について書いた伝記『アメン父』（1998年）についての研究も、「ポロポロ」の分析において重要だ。というのも、伝記では、父種助と小実昌とキリスト教がどのようにして互いに影響しあったかを知ることができるからだ。このテーマについて研究した富岡幸一郎は[[19]](#footnote-39)、『アメン父』の出版後に小実昌と対談し、小実昌は以下のように、伝記の父と「ポロポロ」の父を描く態度が変わらなかったと発言している。

**富岡** 書き方については『ポロポロ』を書かれたころと、これ［＝『アメン父』］を書かれた時と、ご自分ではどうですか。

**田中** 父に関しては、変わらないですね。だけど、自分の理解の仕方が違えば、父の像も違ってくるというふうに、普通はなるんだけど、そういうことともちょっと違うんだな[[20]](#footnote-40)。

「父に関しては、変わらないですね」という小実昌の発言から、「ポロポロ」の中での虚構の父と現実の父をある程度同一視できるため、次節の分析においてもこれを前提とする。また、田中が逝去した2000年から2年前の著作であることから、父という主題は「ポロポロ」以降の田中作品において重要であり、同じ主題が扱われている短編集『ポロポロ』中の唯一の作品である表題作「ポロポロ」は、田中のライトモチーフを扱っているとみなせる。

以上の先行研究をまとめると、次のようになる。小実昌が『ポロポロ』で高く評価され研究が進められているのは、物語表現への内省、すなわち事実を言葉にすることへのためらいについて、そして独立教会を運営する父の周囲の人物を通じて描かれた信仰の様子についてだった。伊藤・堀江・保坂は前者に、谷崎賞選考者と志賀浪はそれぞれの論点に触れていた。

ただし、保坂と堀江は、いずれの議論にもとどまらない論点を提供している。それは、ジェラール・ジュネットの物語論である。ジュネットは、物語の構成要素を、物語内容（histoire）・物語言説（discours）・物語行為（narration）の3つのカテゴリーに大別し、とくに物語行為について深く論じた[[21]](#footnote-41)。物語内容は物語で語られていることを指す。先行研究が注目するような、戦争体験を語る中での事実を言葉にすることへのためらいや、父と独立教会の信者の様子は、物語内容に相当する。それに対して、堀江は、小実昌の小説の特徴として話の使い回しを例に挙げているように、どのようにして物語が書かれているかに焦点に当てており、これが物語言説に相当する。また、保坂が注目する観察者的な語り手は、物語がどのようにして語られるかという物語行為に相当する。このように物語論を意識して田中の発言に注目すると、先の引用の続きで小実昌自身も物語言説や物語行為に自覚的であったことがうかがえる。

**富岡** 年を取ればとか、経験を積めばということも……。

**田中** まるっきり違うことですからね。それが大変困るんですね。【下線：そういう困っていることを今度は書いているわけで、『ポロポロ』の時は、困っていることをあまり書いていませんからね。違いといえば、そういう違いというか。】

**富岡** 『ポロポロ』のほうが……。

**田中** いわゆる小説的ですね。

**富岡** ええ、ちょっと客観的で、小説的。石段のところにおじいさんの影が見えたとか。

**田中** ああいうのは、いくらか話が入っているわけですからね。【下線：まあ今度［＝『アメン父』］のは、これは困っていることも何もかも書こうと思って書いたから、体裁をつくってないですよ】。前よりかね。（略）【下線：今まで通りの書き方だと、物語がウソとは言いませんけど、すぐ物語になっちゃうし、それじゃ違うんじゃないかと。ウソになっちゃ、もちろんいけないしということでね】[[22]](#footnote-42)。（下線部は筆者による）

引用下線部に注目することで、以下のことが指摘できる。『アメン父』では「体裁をつくってない」と小実昌は述べていることから、『アメン父』と対比されている「ポロポロ」は、小実昌が「体裁」と呼ぶものをもっているとわかる。次に、小実昌が「体裁」を「今まで通りの書き方」と言い換えている箇所に注目したい。その箇所で、小実昌は「物語がウソとは言いませんけど、すぐ物語になっちゃう」と述べることで、「体裁」を『アメン父』では採用しなかった理由が、彼が表現しようとしている内容と「ウソ」という語りの態度からそれぞれ要請されているためであるのを示している。従来の研究で指摘されてきた、事実を言葉にして物語にすることへのためらいという物語内容のカテゴリーでの議論が、「体裁」や語り手の態度といった、物語言説と物語行為のカテゴリーにも含まれえるのを示している。また、ここで小実昌が「ウソ」という言葉で、現実と虚構の差異に注意を促している点も重要である。まず、『ポロポロ』に所収されている「大尾のこと」では、「ウソ」について事実そのものを疑うという形で、次のように述べられている。

【前略】ぼくは、なにかを事実とよぶことにも、疑いをもつ。事実といえば、事実そのままで、これくらいはっきりしたものはない、とおっしゃるだろう。しかし、そういうことになっているのが【傍点：事実】で、これも、やはり物語用語ではないかともおもうのだ[[23]](#footnote-43)。

語り手は物語における事実を「物語用語」にすぎないとみなしている。物語における事実を、物語論において考察するうえで、ジュネットの語り手の概念に影響を与えているケーテ・ハンブルガーは重要な示唆を与えている[[24]](#footnote-44)。ハンブルガーは、「ポロポロ」のような一人称小説での語り手の現実と虚構の差異について、以下のように述べている。

「私」—小説の解釈もまた、その他の描かれた人間世界の、「私」—語り手に対する関係を、まったく無視することは絶対にできない[[25]](#footnote-45)。

すなわち、語り手の語っている世界の、語り手にとって、実際には起きえない現実も、解釈においては重要なのだ。

「私」—物語の内容はまったく童話めいた非現実的なものでありうるし、経験可能な現実とは一致しそうもないこともある——しかしそれでもなお、それは、あらゆる空想的な言表と同じく、フィクションではない。極端な非現実的言表でもなお現実言表の性質を残しているのが「私」—言表の形式である[[26]](#footnote-46)。

本論はジュネットの物語論の3つのカテゴリーに依拠しつつ、このハンブルンガーの指摘もその論拠に置く。確かにハンブルガーは語り手の概念に批判的だが、次のような留保をつけている。

語りの機能によって構成されていること、それどころか、語り手なる概念は「私」—物語についてのみ用語法として正しいということが明らかになるからである[[27]](#footnote-47)。

本論が分析する「ポロポロ」は、ハンブルガーの述べている「「私」—物語」に当たる。ハンブルガーは次のようにそれを定義する。

語り手に関係した事件や体験を報告する自伝的形式として考察される。「私」—語り手が第三者について報告する枠物語は、さしあたって顧慮されない[[28]](#footnote-48)。

「ポロポロ」は上記の定義に当てはまる。次節の分析では、「ポロポロ」では霊的存在が登場するような非現実的な出来事が起き、語り手においてはそれが現実であるものとして論を進める。また、語り手の現実を構成する要素について、語り手を生み出した小実昌が、現実の人生を参照していることを「体裁をつくってない」として認めている。先ほど示した本論の立場である、「ポロポロ」の語り手の父と小実昌の現実の父種助をある程度同一視する前提に、『アメン父』で言及されているその他の小実昌の現実の体験を加え、次節では考察を進める。

従来の研究で指摘されてきた物語そのものへの内省や、事実を言葉にすることに対するためらい、あるいは独立教会の様子は、ジュネットの物語論やハンブルガーの指摘をふまえ、一人称小説の語り手がどのような語りを行い、語りが物語の主題を互いに形作っているかを明らかにすることで、別の解釈を与えることができる。

3. 伝記的事実と異言「ポロポロ」の考察

前節では、小実昌の伝記的事実と「ポロポロ」に対する小実昌自身の説明を取り上げた。本節では、「ポロポロ」の語りと主題を分析の準備のために、まず父についてさらに敷衍する。

「ポロポロ」で中心的に言及される語り手の父のモデルは、小実昌の父種助である。『アメン父』によれば、種助は1908年（明治41年）に渡米し、シアトルにて久布白直勝牧師より洗礼を受け、キリスト教徒となった[[29]](#footnote-49)。大正9年(1920)、落城した東京府豊多摩郡千駄ヶ谷の東京市民協会(現東京都世田谷区代田東京都民教会）で、亡くなった久布白の代わりに牧師に就任し、その後、九州小倉のシオン教会の牧師になるものの、すぐに辞した。昭和2年(1927)、アサ会の設立と、遵聖への改名を決意し、昭和4年(1929)、広島県呉市本通の呉バプテスト教会の牧師が欠員したために、その任に就いた。1920年よりアサ会に入信していたセーラー万年筆阪田久五郎から教会が買い上げた別荘を集会所としていた。昭和6年(1931)、実質的にアサ会となっていた呉バプテスト教会は西部組合と分裂し、西南学院のボールデン院長解任事件の原因にもなり[[30]](#footnote-50)、最終的に血縁も地縁もない呉で唯一の帰属先のキリスト教共同体から排除されていた。「ポロポロ」の作中で「世間のひとがあきれているのはもちろん、ほかの教会の信者たちも、キリスト教の恥さらしと思ったにちがない[[31]](#footnote-51)」とあるように、周囲から疎まれていた。

小実昌の幼少期の父の記憶は、上記の略歴からわかるように、アサ会の遵聖としてのものだった。『アメン父』の記述によれば、小実昌が生活していた家の様子やアサ会の集会所の位置を正確に知ることができる。「ポロポロ」では、「ぼくの家は、山の中腹に、ひとつだけぼつんと高く建っていた[[32]](#footnote-52)」とある。『アメン父』によれば、山の側面には平屋が一番下にあり、種助が「中段」と呼んだ旧阪田別荘[[33]](#footnote-53)の集会所が、山の尾根にあった一番高いところの家との間にあった[[34]](#footnote-54)。「ポロポロ」では戦時中に参拝者が少なかったことから一番下の家を集会所代わりにしているという記述があるが[[35]](#footnote-55)、『アメン父』によれば、一番下の家が生活の拠点だったことがうかがえるので、「ポロポロ」の作中で居住空間と礼拝する場所が一致している点は現実と同様だ[[36]](#footnote-56)。

ところで、旧制中等部の頃に小実昌が洗礼を受けていた自伝的事実があり[[37]](#footnote-57)、本人の意思とは無関係に、生活の中で信仰が問題になっていた。では、「ポロポロ」の語り手にとって信仰は、まさに「ポロポロ」の題に採用されている異言「ポロポロ」を唱える人々を中心にして語られている。そこで、以下では異言「ポロポロ」がどのように語られているかを分析していく。

異言「ポロポロ」は父の独立教会の信者たちが唱えている文句である。語り手は、信者たちの異言が具体的にどのようなものであったかを次のように説明している。

うちの教会のひとは、異言という言葉さえもつかわなかった。ただ、ポロポロやっているのだ。／このポロポロは、いわば、一木さんの口ぐせ（？）だった。ポロポロの【傍点：もと】は、使徒パウロだろう。しかし、一木さんは、パウロ先生の霊に、いつもゆさぶられていたかもしれないけど、これは、やはり、祈りのとき、ぽろぽろ、と一木さんの口からこぼれでたものにちがいない[[38]](#footnote-58)。（傍点は原文ママ）

語り手は、異言「ポロポロ」について、聖書を参照にしつつさらに考察を進める。

イエスは、十字架にかけられる前の夜、ゲッセマネ（ルカ福音書ではオリブ山）というところで、切に祈った、と聖書には書いている。だが、そのとき、イエスは日常はなしていたらしい【アラム語で祈りの【傍点：言葉】をのべたのでもなく、またユダヤの祈祷用の【傍点：言葉】を口にしたのでもなくて、ただ、ポロポロやっていたのではないか】[[39]](#footnote-59)。（傍点は原文ママ）

下線部で強調されているように、異言「ポロポロ」は「言葉」ならざるものとみなされている。父の教会の祈祷会が終わるときには、次のように指摘される。

やがて、ポロポロもしずまった。これも、しずまる、なんて言うのはおかしい。だが、まるで言葉ではないものに、言葉をくっつけるのだから、かんべんしてほしい[[40]](#footnote-60)。

しかし、このように異言「ポロポロ」は言葉で語りえない対象として否定形でしか語られていないために、具体的に「ポロポロ」が何を意味しているか作中では明らかにされない。そこで、否定されている「言葉」とは作中においてどのような意味をもつのかという観点から、あたかも「言葉」と対となっているかのような「ポロポロ」の意味を分析していく。

先の引用で、語り手はキリストが死の直前に異言「ポロポロ」を唱えていたと考えているのを確認した。その直後に以下のような記述がある。

ルカ福音書二十二章によると、その夜、オリブ山でイエスはこう祈ったという。「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」／みこころならば……みこころが成るようにしてください、というのは、神への要求でもなければ、自分の願いでもない。ただ、神を【傍点：さんび】させられているのだろう。【下線部：言葉は、自分の思いをのべることしかできない】。イエスは、自分の思いをのべているのではないのだ。［中略〕【下線部：ところが、世間では、いや、キリスト教の教会の人たちも、イエスは、それこそ世間の言葉で祈ったとおもいこんでいるのが、おかしい】[[41]](#footnote-61)。(下線部は筆者による、傍点は原文ママ)

下線部の「言葉は、自分の思いをのべることしかできない」とは、先行研究で取り上げられていた「北川はぼくに」や「大尾のこと」のように、語り手が自分以外の人物について語るさいに述べられる内省に通じている。例えば、「大尾のこと」では以下のように語られている。

［１］北川［=「北川はぼくに」の登場人物］が、おそらくひとにははなさなかったそのことを、ぼくにはなしてくれたことが、すべてだったのに、ぼくは、それを北川がはなした内容にし、つまり物語にしてしまった。／［２］それとおなじように、ぼくは、大尾を物語にした。また、くりかえすが、大尾は大尾だ。その大尾を物語にすると、大尾は消えてしまう。あるいは、似て非なるもの。／ほんとの大尾が消える、などとも言うまい。ほんと、なんて言葉もまぎらわしい。【下線：戦争の悲劇とか、戦争の被害者だとか、そんな言葉】は、ぼくはつかったことはないが、そういう言葉をつかうのとおなじことを、ぼくはしゃべってきた[[42]](#footnote-62)。（番号・下線は筆者による）

［１］と［２］は、事実を言葉にする物語への内省と先行研究で指摘されている点に相当する。下線部は、「イエスは、それこそ世間の言葉で祈ったとおもいこんでいるのが、おかしい」の「世間の言葉」に相当している。『ポロポロ』では、「世間」と「言葉」が結びつけられ、「世間」は批判の対象となっている。同様の考えは「北川はぼくに」でも示されている。

【下線：戦争で負けたときけば、だれだってある感慨をもち、思い入れの顔つきや言葉にもなる、それがふつうだ、と世間では言うだろう。／しかし、【傍点：だれだって】そうかもしれないが、ぼくはなんともおもわなかった】。くやしいとも、なさけないとも、逆にほっとしたとも、なんともおもわなかった。【中略】くりかえすけど、戦争に負けたとなると、だれにでも感慨があり、思い入れもでてくるのかもしれないが、ぼくはなにもおもわなかった。そして、北川があのことをはなしたときにも、北川に思い入れみたいなものはなかった[[43]](#footnote-63)。（下線は筆者による、傍点は原文ママ）

下線部では、「世間では言」われている「言葉」に対して、語り手が反駁している。引用の後半では、さらに反駁が繰りかえされ、語り手の言及する「北川」もまた、「世間」の考えとは異なる立ち位置にいることが強調されている。

ここまでの分析から、「言葉」は「世間」と「自分」によって構成されていることが明らかになる。前者に分類される「言葉」は、祈りにおける「世間の言葉」や敗戦で「だれだってある感慨をもち、思い入れの顔つきや言葉にもなる」と言われているような、語り手が終始批判している類型の「言葉」だ。後者は、祈りでの「言葉は、自分の思いをのべることしかできない」や敗戦について「【傍点：だれだって】そうかもしれないが、ぼくはなんともおもわなかった」と言われているような、語り手が「世間」と対立する主体的な自己の想念を表現するものだ。「ポロポロ」での「言葉」は、連作短編小説の別の作品と合わせて考えることで、以上のように構成されていることが明らかになった。

異言「ポロポロ」は否定形でしか語られていないため、これまで否定されている「言葉」の分析を行ってきた。そして、「言葉」は、「世間」と「自分」の2つの類型があることが明らかになった。ところで、異言「ポロポロ」は「言葉」を否定するものであるから、「世間」にも「自分」にも属さない行為や想念だと考えられる。ここで注意すべきなのは、異言「ポロポロ」を唱えていた作中の独立教会が周囲から疎まれていたこと、そして異言「ポロポロ」は「からだがふるえ、涙がでて、もうどうにもとまらなく、ポロポロ始まってしまうのだろう[[44]](#footnote-64)」ような自己による統御を逸脱した状態を生み出すことだ。つまり、異言「ポロポロ」は、単に言葉ならざるものという否定形で扱われるものではなく、「世間」や「自分」にも属していない状態を生み出す効果を与えているのだ。

ところで、本論ではハンブルガーの「「私」—物語」の理論に基づいて、語り手の現実を構成する要素について、語り手を生み出した小実昌が、現実の人生を参照しているのを前提にしている。では、異言「ポロポロ」はどうなのだろうか。作中では、引用部で示したように、「ポロポロ」という言葉はパウロがつまったものだとされている。しかし、その部分が創作であったことを平岡篤頼との対談で小実昌自身が次のように証言している。

いやいや、それは僕が「ポロポロ」と短編に題名をつけただけでありまして。というのは、あるおじさんが、ハンコ屋さんなんですけど、ポロポロ、ポロポロ言うんですよ、一人一人言うことは違うんでね。それでそれを短編の題名にもってきただけですよ。“ポロポロ”は、“南無妙法蓮華経”とか“南無阿彌陀仏”とかに思わたんじゃ困るんでしてね、ただ“ポロポロ”言ってる、ただ何か言ってるということだけのことなんですよ[[45]](#footnote-65)。

すなわち、異言「ポロポロ」は、現実には由来がない。しかし、作中ではパウロという名前が由来として示されている。これは2節と注目した小実昌の「体裁」にあたる。さらに、『アメン父』で「ポロポロ」の独立教会がアサ会について詳細に描かれているのにもかかわらず、異言「ポロポロ」という言葉が一度も登場しない。本節での分析の結果もたらされた異言「ポロポロ」のもつ「世間」や「自分」にも属していない状態を生み出す効果は小実昌が語りの中で意図的に作り上げていったと考えられる。次の節では、小実昌が語りを通じて作り上げた異言「ポロポロ」の効果を具体的な語りの分析を通じて確認する。

4. 黙説法と共同体からの排除

ジェラール・ジュネットは、2節で述べたように、その物語論の中で、物語を語っている語り手のあり方、すなわち語り（narration）に注目した。ジュネットが主著『物語のディスクール』（*Figure 3* , 1973）で集中的に取り上げる『失われた時を求めて』では、物語の中で流れる時間が複層的になっている。出来事の省略、時間を止めたままの風景の描写、ある時点から未来に起きることを示す語り、あるいはその逆に物語の中で起きてしまった出来事から前の時点へ戻るといった語りが様々な形で見受けられる。「ポロポロ」では、語りの手法として黙説法（paralipse）が用いられている。ジュネットによれば、修辞学でも知られた古典的な用法であり、例えば一人称視点であれば、語り手はその「重要な行為や思考を省略する[[46]](#footnote-66)」。そして、語り手は、その時点で省略した内容を、後のある時点で語る。以下で、「ポロポロ」における黙説法を説明するにあたって、まず省略された内容を指摘してから、それがどのように省略されているかを確認する。

3節で、自伝的事実としてアサ会の集会所として使われていた家屋を取り上げた。「ポロポロ」でも、同じように語り手の父が自宅を教会として使っていた。語り手によれば、「中国での戦争の泥沼状態[[47]](#footnote-67)」や「太平洋戦争[[48]](#footnote-68)」の後、「信者のなかには召集されたりして、遠くにいってる者もあった[[49]](#footnote-69)」のに加え、「世間は日本精神の声が高く、ヤソは、もともと、西洋種のアーメン・ソーメン[[50]](#footnote-70)」と忌避され、「憲兵隊や特高から、実際にどれほどの圧迫があったかは、子供だったぼくにはわからないけど、そんな教会には、人々はいきにくかったろう[[51]](#footnote-71)」という事情や、独立教会は「きちがいヤソ[[52]](#footnote-72)」だとみなされていたことがあり、公に活動をすることができなくなっていた。そこで、次のような挿話が語られる。

うちの段々畑のいちばん下は、よその墓場だった。地形の関係で、うちの段々畑は、下にいくほど長さがせばまり、いちばん下は上の段の四分の一ぐらいになっていた。／その下の、そのまたはんぶんぐらいの地所に、よその家の墓がたっていたのだが、ある日、たくさんの男たちがきて、その墓をうちのいちばん下の段々畑にうつした。／父は、もちろん抗議しただろうが、うやむやになったらしい。しかし、せまいところに、大ぜいの男たちがきて、半日ぐらいで墓をうつすというのは、子供のぼくの目にも、どさくさまぎれという感じがあった。／つまりは、大いそぎで既定の事実をつくってしまったのだろうが、作業がおわったときは、もう日が暮れており、墓をうつしかえた男たちがかえって、ほんのすこしたったとき、教会の庭の植木のめんどうを見てる一家のかみさんが、「奥さん！先生！」と、うちにかけこんできた。／人魂を見たというのだ。人魂は、ふわふわ、墓のあたりからうきあがって、そのむこうの崖のほうにながれ、崖の下からちょっぴりのぞいている屋根の上をうごいていったらしい[[53]](#footnote-73)。

さらに、周囲から土地が奪われる挿話は続く。

百姓のオジさんが、一日中、地面にへばりつくようにして、目につかないように、それこそ、一日になんミリかの土地を、こちら側にくいこませてきたりするのだ。その根気と熱心さには、父もあきれた口ぶりだったが、こうして、ある日、気がつくと、となりの畑とのあいだのこちらの私道がなくなって、となりの畑になってしまっている[[54]](#footnote-74)。

これら2つの私有地の収奪から、語り手が生活している父の教会は、キリスト教徒からも迫害され、憲兵隊や特高にも警戒されていたことと合わせて、地域共同体からも排除されていたと考えられる。本論では、種助は現実にキリスト教の共同体からは排除されていたことはすでに確認した。しかし、こうした主題は『アメン父』のような自伝的かつ伝記的事実では確認できない、「ポロポロ」独自の主題、すなわち小実昌が語りによって作り上げた主題だとみなされる[[55]](#footnote-75)。そして、この共同体からの排除の主題こそ、黙説法的に明らかにされた内容なのだ。では、この内容が省略されている描写を検討したい。以下に、「ポロポロ」の冒頭を示す。

石段をあがりきると、すぐにそこに、人が立っていて、ぼくは、おや、とおもった。石段はごろんとぶっとい御影石で、数も四十段ぐらいはあり、その下につづく【下線:段々畑のあいだの道をのぼってくるときも】、前のほうに、人かげはなかったからだ。【中略】石段をあがったところにいた人は一木さんのはずだった。ぼくの家は、山の中腹に、ひとつだけぽつんと高く建っていた。港町特有の家々の屋根と屋根が段々となってかさなりあった坂道の家なみをぬけると、あとは家もまばらで、やがて、【下線:畑のはしの幅五〇センチほどの一直線の細道になり、ぼくの家までは、ちいさな谷をこして、見とおしだった】[[56]](#footnote-76)。（下線部は筆者による）

注目したいのは、下線部である。語り手が帰る家は、3つの家屋のうち、最も手前の家であり、そこで祈祷が行われているのはすでに述べた通りだ。語り手は、段々畑の細道を通って、家路を辿る。ところで、この段々畑とは、まさに2つの私有地の収奪の舞台となった場所だ。つまり、家路までの描写で、語り手は明らかに、人夫たちの侵入のあった段々畑の下にある墓地の傍を、町から山を登っていく時に通っていたのにもかかわらず、見えているはずの墓については一切言及していない。さらに、その作業のあとで「人魂」が出現した一帯は、畑を過ぎた先の石段の上で一木だと取り違えた祖父の「ユーレイ[[57]](#footnote-77)」（以下、「幽霊」と記す）が現れた場所であることも、私有地の収奪の挿話によって遡及的に明かされる。地域共同体から排除されていた記憶が提示されることで、語り手がどのような意味のある場所で幽霊と出会ったかが明らかになるという仕掛けになっているのだ。また、この黙説法の語りは、地域共同体からの排除と幽霊が結びついていることを示してもいる。というのも、語り手が墓の存在を省略している時、幽霊を一木だと考えていたが、墓の存在や排除の記憶が想起された後、語り手は次のような結論を下す。

とんでもない考えのようだが、ぼくは、父が言うとおり、あの人が死んだおじいさんだとすると、いちばん合理的のような気がした。【中略】合理的なユーレイなんておかしいけど、そうとしか考えられない。【中略】くりかえすけど、父にとっては、死んだおじいさんが、記念日の祈祷会の夜にやってきたとしてもポロポロ、ちがう人だとしてもポロポロで、ただポロポロなのだ[[58]](#footnote-78)。

ここで語り手は、祖父の幽霊との遭遇について、「とんでもない考え」や「合理的なユーレイなんておかしい」といった逡巡をしている。一方で、父はその考えが定まっていると語り手は考えている。つまり、「死んだおじいさんが、記念日の祈祷会の夜にやってきたとしてもポロポロ、ちがう人だとしてもポロポロ」の「ちがう人」とは、父にとって、生きている人間のことではなくて、誰の「人魂」かは同定できないが、幽霊を指すのだ。まとめれば、語り手は、幽霊の存在を認めつつも戸惑っているような宙吊り状態であり、父は幽霊を認めていると考えている。黙説法を媒介にすることで地域共同体からの排除の記憶と幽霊が結びついている。そして、この結びつく二項は、前節で私たちが分析した異言「ポロポロ」が含む「世間」と「自分」の二項にも対応している。まず、「世間」とは、語り手やその父を排除するキリスト教共同体や地域共同体のことである。次に、「自分」とは、宙吊り状態の語り手や幽霊を自明のものとみなしている父を示している。語り手は異言「ポロポロ」を唱えているわけではないのでその態度は宙吊りになっているが、対して父は異言「ポロポロ」の人であり、「合理的なユーレイ」という自己の合理性を超えた存在を認められるのである。黙説法の語りという自己統御的な制約のうちにある語り手は、異言「ポロポロ」・排除の記憶・幽霊という「ポロポロ」を構成する3つの重要な主題を提示する過程で異言に漸近していく。物語の末尾にて「父にとっては」と父の代弁であることを示しつつ語り手が異言を唱えるように思われるのは、その制約ゆえなのだ。

6. 結論と課題

私たちは、本論で「ポロポロ」の先行研究の内容を物語論の3つのカテゴリーにおいて捉え直すことで作品分析することを提案した。2節では、小実昌も物語言説と物語行為に自覚的である発言を取り上げ、そこで小実昌が問題視していた物語における虚実の問題をハンブルガーの一人称視点小説の分析を前提に、「ポロポロ」での非現実的な出来事が語り手にとっての現実であるとみなした。また、田中が自覚的に語りを作り上げている点から、伝記的事実を私たちの解釈で部分的に参照することにした。3節では、こうした前提に基づき、小実昌の父種助と異言「ポロポロ」の伝記的事実を確認した。次に、異言「ポロポロ」が「言葉」を否定する形で記述されている点に注目して、「言葉」を構成している「世間」と「自分」という要素から異言「ポロポロ」を「世間」と「自分」に属していない状態だと定義した。4節で、黙説法による語りと共同体からの排除という主題が対になっていることを墓地をめぐる挿話の分析を通じて示し、それが異言「ポロポロ」で否定されている「世間」と「自分」にもそれぞれ対応していることを示した。また、幽霊に対する語り手の態度が宙吊りであることが、物語末尾で語り手が父を代弁する形で異言「ポロポロ」を唱えている理由であるのを示した。しかし、私たちの分析は先行研究で取り上げられている短編にしか焦点を当てることができなかった。また、1970年代末の日本文学において小実昌のような従軍経験を題材にした小説の立ち位置を確認することができなかった。今後の研究の課題としたい。

**註**

**謝辞**

1. 収録作品とそれぞれの初出は以下の通り。「ポロポロ」、『海』、9巻104号、中央公論社、1977年12月、26-39頁。「北川はぼくに」、『海』、10巻107号、1978年3月、20-33頁。「岩塩の袋」、『海』、10巻110号、1978年6月、22-37頁。「魚撃ち」、『海』、10巻113号、1978年9月、10-24頁。「鏡の顔」、『海』、11巻117号、1978年1月、87-100頁。「寝台の穴」、『海』、11巻120号、1978年4月、34-47頁。「大尾のこと」、『海』、11巻121号、1979年5月、160-179頁。 なお、初出時から中央公論社から1979年5月に刊行された単行本と2004年の河出文庫版はいずれも引用箇所について大きな異同がないため、引用頁数はすべて最も新しい版である河出文庫版に依拠する。 [↑](#footnote-ref-21)
2. 田中、「ポロポロ」、前掲書、32頁。 [↑](#footnote-ref-22)
3. 「選評」、『中央公論』、94巻11号、1979年、352-356頁。 [↑](#footnote-ref-23)
4. 前掲書、353頁。 [↑](#footnote-ref-24)
5. 「それも、ほんとは、物語ではないものが、自分にはあるんだが、口にでると、物語になってしまう、というのでもあるまい。物語をはなす者は、もうすっかり、なにもかも物語なのだ」。田中、「寝台の穴」、『ポロポロ』、河出文庫、河出書房新社、2016年、172頁。 [↑](#footnote-ref-25)
6. 「選評」、前掲書、354頁。 [↑](#footnote-ref-26)
7. 前掲書、355頁。 [↑](#footnote-ref-27)
8. 同書。 [↑](#footnote-ref-28)
9. 田中小実昌、「大尾のこと」、『ポロポロ』、前掲書、218-219頁。 [↑](#footnote-ref-29)
10. 「選評」、前掲書、356頁 [↑](#footnote-ref-30)
11. 目録は以下を参照のこと。伊藤義孝、「田中小実昌著者目録 —— 1990年〜2001年」、『愛知淑徳大学国語国文』、第25巻、2002年、1-18頁。 [↑](#footnote-ref-31)
12. 伊藤義孝、「田中小実昌論 —— その語りのあり方」、『愛知淑徳大学国語国文』、第28巻、2005年、185頁。 [↑](#footnote-ref-32)
13. 田中、「北川はぼくに」、『ポロポロ』、前掲書、65頁。 [↑](#footnote-ref-33)
14. 志賀浪幸子、「田中小実昌「ポロポロ」」、『私小説研究』、第4号、法政大学大学院私小説研究会、2003年、60-61頁。 [↑](#footnote-ref-34)
15. 田中、「ポロポロ」、『ポロポロ』、前掲書、15頁。 [↑](#footnote-ref-35)
16. 堀江敏幸、「フィリップ・マーロウを訪ねたチェスの名人」、『書かれる手』、平凡社、2000年、149頁。 [↑](#footnote-ref-36)
17. 堀江敏幸・池内紀、「愛に近い異様なもの」、『ユリイカ』、32巻9号（通号434号）、青土社、2000年6月、36頁。 [↑](#footnote-ref-37)
18. 保坂和志、「小実昌さんのこと」、『新潮』、97巻5号、新潮社、2000年5月、137頁。 [↑](#footnote-ref-38)
19. 富岡幸一郎、「祈りの言葉のリレー —— 田中小実昌論」、『文芸評論集』、アーツアンドクラフツ、2005年、159-170頁。 [↑](#footnote-ref-39)
20. 田中小実昌・富岡幸一郎、「田中小実昌と「アメン父」」、『すばる』、11巻6号、集英社、1989年6月、274頁。 [↑](#footnote-ref-40)
21. 物語論の簡潔な歴史や用語の詳細は、以下を参照のこと。橋本陽介、『物語論基礎と応用』、講談社選書メチエ、647巻、講談社、2017年、第1–2章。 [↑](#footnote-ref-41)
22. 田中・富岡、前掲書、274頁。 [↑](#footnote-ref-42)
23. 田中、前掲書、「大尾のこと」、前掲書、213頁。 [↑](#footnote-ref-43)
24. ジュネットは、ハンブルガーの主著『文学の論理』の仏語訳に序文を寄せている。Käte Hamburger, **Logique des genres littéraires** , tr Pierre Cadiot, Paris, Seuil, 1986, p. 7-15. [↑](#footnote-ref-44)
25. ケーテ・ハンブルガー、『文学の論理』、植和田光晴訳、松籟社、1986年、247頁。 [↑](#footnote-ref-45)
26. 前掲書、256頁。 [↑](#footnote-ref-46)
27. 前掲書、246頁。 [↑](#footnote-ref-47)
28. 前掲書、242頁。 [↑](#footnote-ref-48)
29. 田中小実昌、『アメン父』、河出書房新社、1989年、40頁。 [↑](#footnote-ref-49)
30. 以下の文献を参照のこと。枝光泉「日本バプテスト西部教会の歴史 —— 「アサ会」事件について」『キリスト教社会問題研究』、第48号、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1999年、102-124頁。金丸英子「西南学院とアサ会 —— ボールデン院長の解任を巡って」『西南学院史紀要』、第6号、西南学院、2015年、49-59頁。 [↑](#footnote-ref-50)
31. 「ともかく、そんなふうなので、世間の人があきれているのはもちろん、ほかの教会の信者たちも、キリスト教の恥さらしとおもっていたに違いない」。以下を参照のこと。田中、「ポロポロ」、前掲書、14頁。 [↑](#footnote-ref-51)
32. 田中、「ポロポロ」、前掲書、10頁。 [↑](#footnote-ref-52)
33. 『アメン父』では「坂田」と一貫して表記されている。なお、阪田とは阪田久五郎のことで、セーラー万年筆の創業者。彼もキリスト教徒で、種助と親交があった。なお、「ポロポロ」で「うちの教会の土地になる前は、あるお金持の別荘だった山」（前掲書、19頁）とあるのは、この点が参照されている。 [↑](#footnote-ref-53)
34. 田中、『アメン父』、5頁。 [↑](#footnote-ref-54)
35. 「金曜日の夜の祈祷会でも、三人か四人しか信者がこないのなら、木立のなかの日本家屋の教会堂までのぼっていかなくて、下のぼくたちの家の部屋で祈祷会をということになったのだろう」。以下を参照のこと。田中、「ポロポロ」、前掲書、17頁。 [↑](#footnote-ref-55)
36. 前掲書、23頁。 [↑](#footnote-ref-56)
37. 田中、『アメン父』、121-123頁。 [↑](#footnote-ref-57)
38. 田中、「ポロポロ」、前掲書、12頁。 [↑](#footnote-ref-58)
39. 同書。 [↑](#footnote-ref-59)
40. 前掲書、22頁。 [↑](#footnote-ref-60)
41. 前掲書、13頁。 [↑](#footnote-ref-61)
42. 田中、「大尾のこと」、前掲書、218頁。 [↑](#footnote-ref-62)
43. 田中、「北川はぼくに」、前掲書、56頁。 [↑](#footnote-ref-63)
44. 田中、「ポロポロ」、前掲書、14頁。 [↑](#footnote-ref-64)
45. 田中小実昌・平岡篤頼、「文学的ポロポロ —— 早稲田文学対談11」、『早稲田文学（第8次）』、47号、1980年4月、11頁。 [↑](#footnote-ref-65)
46. « l'omission de telle action ou pensée » ジェラール・ジュネット、『方法論の試み』、花輪光・和泉涼一訳、書肆風の薔薇、1985、229頁。Gérard Genette, *Figures III*, Col. Poétique, Paris, Seuil, 1972, p. 212. また、ジュネットの黙説法については、以下を参照のこと。ジュネット、前掲書、51-52頁。同書、228-229頁。Genette, p. 93-94. *Ibid.*, p. 211-212. [↑](#footnote-ref-66)
47. 田中、「ポロポロ」、前掲書、16頁。 [↑](#footnote-ref-67)
48. 同書。 [↑](#footnote-ref-68)
49. 同書。 [↑](#footnote-ref-69)
50. 前掲書、17頁。 [↑](#footnote-ref-70)
51. 同書。なお、田中のエッセイに特高の尋問に応じる父の記憶を書いたエッセイがある。以下を参照のこと。田中小実昌、「父と特高」、『オール讀物』、43巻1号、1988年1月、280-290頁。ところで、そもそも石段で出会った人物はこうした事実や、「ソフトをかぶり、二重【傍点：まわし】」（前掲書、9頁）を着用していることから、特高だったのではないかとも考えられる。しかし、本論では、ハンブルガーの理論に準拠し、語り手が幽霊だと考えていることを現実の水準において否定する必要がない。また、幽霊が人間のようにみえるモチーフは、小実昌の初期の翻訳作品にその原型が見受けられる。その作品は、殺害されて幽霊になった主人公は、幽霊でありながらも人間と同じように行動が制限され、死者の視点から一人称視点で語るというものだった。つまり、幽霊だが人間のような姿をしているのは小実昌にとって既知のイメージだった。以下の文献を参照のこと。J・B・オサリヴァン、『憑かれた死』、田中小実昌訳、早川書房、1957年。以上の2つの理由から、ソフト帽の人物が特高であったという説は本論において退けられる。 [↑](#footnote-ref-71)
52. 同書。 [↑](#footnote-ref-72)
53. 前掲書、20-21頁。 [↑](#footnote-ref-73)
54. 前掲書、21頁。 [↑](#footnote-ref-74)
55. 以下で呉に関係する記述がみられる。田中、『アメン父』、3-8頁、35-36頁、58-74頁、121-133頁。しかし、65-66頁では近隣住民を助ける話、71頁では呉の周辺の知人宅を訪ねる話といったように、むしろ共同体と交流している姿が描かれている。管見によれば、そのほかの資料でも共同体から排除されていた話題が扱われていたことはほとんどない。従って、「ポロポロ」でキリスト教共同体の外での軋轢が描かれているのは、「ポロポロ」に独自の主題だと考えられる。 [↑](#footnote-ref-75)
56. 田中、「ポロポロ」、前掲書、9-10頁。 [↑](#footnote-ref-76)
57. 前掲書、34頁。 [↑](#footnote-ref-77)
58. 前掲書、35頁。 [↑](#footnote-ref-78)